

修士論文(要旨)

2026 年 1 月

アニメ視聴が日本語学習の動機づけに与える影響
—中国の日本語学科大学生の学習動機に関する調査より—

指導 齋藤 伸子 教授

国際学研究科
国際学術専攻
言語教育実践研究学位プログラム
224J1001
安 文君

Master's Thesis(Abstract)
January 2026

Learning Motivation of Chinese University Students Majoring in Japanese: The
Role of Anime Viewing

Wenjun An
224J1001

Master of Arts Program in Linguistics and Language Education
Master's Program in International Studies
International Graduate School of Advanced Studies
J. F. Oberlin University
Thesis Supervisor: Nobuko Saito

目次	
第1章 はじめに	1
1-1 本研究の背景	1
1-2 本研究の目的とリサーチクエスチョン	1
1-3 本研究の意義	2
1-4 用語定義	3
1-5 中国における大学生世代のアニメ視聴環境	3
第2章 先行研究と理論的枠組み	6
2-1 動機づけ理論	6
2-2 アニメ視聴および学習動機の先行研究	7
2-3 学習継続 / 中断と学習環境およびリソース	8
第3章 研究方法	9
3-1 調査目的	9
3-2 調査対象	9
3-2-1 対象の選定	9
3-2-2 設定人数の根拠	9
3-3 調査方法	10
3-3-1 アンケート調査	10
3-3-2 半構造化インタビュー調査	11
3-3-3 本研究における年齢グループの定義	12
第4章 調査結果	13
4-1 量的調査の結果	13
4-2 質的調査の結果	20
4-2-1 調査対象者 40 番の事例	21
4-2-2 調査対象者 14 番の事例	25
4-2-3 調査対象者 52 番の事例	30
4-3 調査結果のまとめ	33
第5章 考察および結論	34
5-1 量的結果の考察	34
5-2 質的結果の考察	35
5-3 統合考察	36
5-4 結論	38
5-5 今後の展望	38
参考文献	i
付属資料①インタビュー調査 SCAT Form	-1-
付属資料②アンケート調査協力者向け説明書	-27-
付属資料③アンケート調査同意書	-31-
付属資料④インタビュー調査協力者向けの説明書	-33-
付属資料⑤インタビュー調査同意書	-38-
付属資料⑥アンケート調査質問リスト	-40-
付属資料⑦インタビュー調査質問リスト	-46-

本研究は、中国の日本語学科に在籍する大学生を対象として、日本のアニメ視聴経験が日本語学習の動機づけの形成と変遷、ならびに学習継続や進学志向にどのように関与するかを明らかにすることを目的とした。中国では高考における外国語科目として日本語を選択する受験生が増加しており、同時にアニメ・マンガを契機として日本語学習を開始する学習者が多いという状況が指摘されている。本研究は、娯楽的経験としてのアニメ視聴が、統合的動機づけと道具的動機づけの双方にどのように作用し、人生段階の変化の中でどのように意味づけが変容するのかを、量的・質的の混合研究法により検討する点に特徴がある。

理論的枠組みとして、Gardner の社会心理学的モデルおよび Dörnyei の L2 動機づけ自己システムを基盤に据え、アニメ視聴を媒介とする文化的親和性、情意的関与、理想自己の形成に注目した。研究課題は、学習初期の動機がその後どのように変化するか、アニメ由来の「好き」という感情が受験期等の困難を支え得たか、アニメを契機とする学習が進学・留学等の具体的目標へどう接続したか、情動的動機が学習継続に与える影響は何か、の四点である。

方法として、アンケート調査（有効回答 60 名）と、半構造化オンラインインタビュー（3 名）を実施した。アンケートでは視聴開始時期、頻度、学習継続状況、学習理由、動機強度（リッカート尺度）等を収集し、全体傾向の把握を行った。インタビューはアニメ視聴の経験史、日本語学習開始の契機、動機づけの変遷、自己認識の変化等を中心に聴取し、逐語録を SCAT により分析して概念化・カテゴリー化し、事例ごとのストーリーラインを生成した。

量的結果から、視聴開始は小学校期が最頻で、幼少期と小学校期を合わせると全体の約 3 分の 2 を占め、早期接触が一般的であった。また、視聴頻度はライフステージによって変動し、高校期で低下しやすい一方、大学期以降に回復する傾向がみられた。日本語学習の継続は 60 パーセントで、中断理由の中心は「興味の変化」ではなく「日本語を使う機会の少なさ」であった。学習理由は進学・就職など実利的要因が最多である一方、アニメや他の日本文化への関心も一定程度維持されていた。さらに、初期と現在の動機強度の比較では、道具的動機は概ね横ばいで高水準を保ち、統合的動機は時間経過とともにわずかに上昇し、両者が置き換わるのではなく併存しながら学習を支える可能性が示唆された。

質的分析では、三事例に共通して、アニメ視聴は学習の直接的成果を即時に生むというよりも、日本文化への親近感、物語世界への没入、言語への好意的態度の形成を通じて統合的動機づけを育む「入口」として機能し、その後、受験や進路選択という外的条件の中で道具的動機づけと結びつき、学習継続の根拠として再編される過程が描出された。とりわけ、高校期には制度的な学習負担による時間制約が視聴・自律学習双方を圧縮しやすい一方、大学期には授業・課題・研究・就業等で日本語接触機会が多層化することで、視聴が「趣味」であると同時に「学習補助」として再意味づけされ、学習行動が日常化する様相が確認された。

以上より、本研究は、アニメ視聴を契機とする動機づけを「統合的から道具的への単純な移行」として捉えるモデルは十分ではなく、むしろ統合的動機づけと道具的動機づけが人生段階と使用環境に応じて重層的に併存し、相互補完的に学習継続を支えることを示した。実践的示唆として、学習者の興味を維持する支援に加え、日本語を使用できる場や役割を設計し、教室外接触と学習経験を接続することが、学習中断の抑制に有効である可能

性が高い。限界として、アンケートが 60 名、質的データが 3 名に限定される点、視聴内容の詳細分析を主目的としない点が挙げられる。今後は、対象者属性や学習環境の差を踏まえた比較、縦断的追跡、接触機会の質的差異の精緻化を通じて、動機づけ変容の因果連関をより明確にすることが課題である。

参考文献

日本語文献

1. 梅田康子 (2005) 「学習者の自律性を重視した日本語教育コースにおける教師の役割——学部留学生に対する自律学習コース展開の可能性を探る——」愛知大学語学教育研究室紀要 39(12), 59-77, 2005-01, pp. 67-68
2. 大谷尚 (2008) 「4 ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案——着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き——」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (教育科学)』第 54 巻第 2 号, pp. 27-44.
3. 大谷尚 (2011) 「SCAT: Steps for Coding and Theorization——明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法——」『感性工学——日本感性工学会論文誌』第 10 巻第 3 号, pp. 155-160.
4. 角川書店 (2003) 『公式ガイドブック 3 機動戦士ガンダム SEED 明日への翼』角川書店, ISBN 978-4048536882. 2003 年 10 月, pp. 99.
5. 熊野七絵・川嶋恵子 (2011) 「『アニメ・マンガの日本語』Web サイト開発——趣味から日本語学習へ——」『国際交流基金日本語教育紀要』第 7 号, pp. 103-117.
6. 林さと子 (1998) 「第二言語学習／習得と個別性要因」『第二言語としての日本語学習および英語学習の個別性要因に関する基礎的研究』平成 8～9 年度科学研究費補助金研究報告書

英語文献

10. Bandura, A. (1977) Social Learning Theory. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall. (原野広太郎 (監訳) (1979) 『社会的学習理論——人間理解と教育の基礎——』金子書房 ISBN 978-4-7608-8017-1, 249, 26p)
11. Csikszentmihalyi, M. (1990) Flow: The Psychology of Optimal Experience. New York: Harper & Row. (今村浩明 (訳) (1996) 「フロー体験 喜びの現象学」世界思想社 ISBN 978-4-7907-0614-4, 378p)
12. Deci, E. L. (1971) Effects of externally mediated rewards on intrinsic motivation. Journal of Personality and Social Psychology, 18(1), pp. 105-115.
13. Dörnyei, Z. (2009) The L2 motivational self system. In Z. Dörnyei & E. Ushioda (Eds.), Motivation, Language Identity and the L2 Self (pp. 9-42). Bristol: Multilingual Matters.
14. Dörnyei, Z., & Ushioda, E. (2011) Teaching and Researching Motivation. Harlow: Pearson Education Limited.
15. Erikson, E. H. (1950) Childhood and Society. New York: W. W. Norton.
16. Gardner, R. C. and W. E. Lambert. (1972) Attitudes and Motivation in Second Language Learning. Rowley, MA: Newbury House
17. Gardner, R. C. (1985) Social Psychology and Second Language Learning: The Role of Attitudes and Motivation. London: Edward Arnold.
18. Long, M. (1988) Instructed interlanguage development. In L. Beebe (Ed.), Issues in Second Language Acquisition (pp. 115-141). New York: Newbury House.